

### 第3回「確かな学力育成プラン」検討委員会 議事録

- ◆日時 平成28年9月9日(金曜日) 午後3時30分～午後5時00分
- ◆場所 仙台市役所上杉分庁舎 12階 教育局第1会議室
- ◆出席委員

氏名(敬称略)	所属 職名	備考
荒井 崇	東北大学大学院教授	
板垣 信哉	宮城教育大学教授	委員長
大泉 晶子	仙台市PTA協議会 監事	
大草 芳江	(有) FIELD AND NETWORK 取締役	
亀倉 靖宏	仙台市立上杉山中学校長	(欠席)
今野 和賀子	仙台市立錦ヶ丘小学校長	副委員長
佐々木 守世	(株) ホームセレクト 代表取締役	
針生 真由美	仙台市PTA協議会 副会長	
宮本 真由巳	住吉台中学校区学校支援地域本部 SV	
杉山 勝真	仙台市教育委員会学校教育部長	
今野 孝一	仙台市教育委員会学校教育部参事	
猪股 亮文	仙台市教育委員会教育指導課長	(欠席)
堤 祐子	仙台市教育センター所長	
佐藤 淳一	仙台市教育委員会学びの連携推進室長	

◆傍聴 3名

◆報道関係 なし

◆配布資料

- ・確かな学力育成プラン骨子(案)

◆会議の概要

- 1 開会
- 2 委員長挨拶
- 3 協議(進行:副委員長)

(1) プラン骨子案について(佐藤委員)

- ・全体的な枠組みについては現行プランを検証しながら、今後5年間の取組で考える。
- ・第2期仙台市教育振興基本計画に示された基本方針を踏まえて策定する。
- ・新たな「確かな学力」の観点から、7年間の児童生徒の確かな学力の状況の変化を分析し、具体的な事業の見直しを図る。
- ・計画期間の訂正。平成30年度から平成34年度までの5年間とする。
- ・5年としたのは、教育振興基本計画が5年で見直しを図るため、連動する形で合わせている。
- ・全体構成案については4章で考えている。現行プランよりページ数を落とし、現行プランより分かりやすく、ビジュアル的にも見やすくする。よりこのプランが、周知徹底が可能ないようにしていく。
- ・本日は、本市で育成すべき「確かな学力」について、また、第2期仙台市教育振興基本計画についてもご意見をいただきたい。
- ・構成図は崩すことなく、様々な事業・施策を計画していく。

(2) 本市で育成すべき「確かな学力」

(質疑等)

- ・(佐藤委員)本市では確かな学力を学習意欲・基礎的知識・応用力で押さえている。それぞれ定着を図ることができるよう取り組んできた。具体的にこんな力が足りないなどのご意見をいただきたい。
- ・(荒井委員)思考力・判断力・表現力はこれからも重要だと思う。世の中が大きく変化している。人口が減ってきていることから、今までの政策作りとは違い、成長を前提とするのではなく、いわゆる撤退路線で考えるようになってきている。抜本的に政策のつくり方を変えなければいけなくなってきた。今までよりもいろんな考えを持っている人と議論し合う中で、擦り合わせて新しいコンセプトをつくっていく機会が増えている。役所では、住民に政策について説明する

ことが増えていて、自分の考えを分かりやすく説明することが必要になってくる。財政については厳しい目が向けられている。福祉で言うと充実を図る分にはいいのだが、サービスを削減するとなると大変になる。そういったときに、他者とコミュニケーションをとりながら、他者との協働から課題を解決する、そういうことも応用力かなと思う。みんなでコラボレーションしてやっていく力が重要と感じている。

- ・(佐々木委員) コミュニケーション能力が高いお子さん、低いお子さん、自然といると思うが、コミュニケーションが低い子は、チームでリカバリーしていくことで学習意欲に結び付くこともあるのかなと思った。応用力としてコミュニケーション能力を伸ばすことは、最終的に学力向上につながっていくと思った。
- ・(大草委員) 変化を感じる場所として、知識社会と言われているけど知っているだけではなく、情報を活用して新しいものをつくれるか。与えられたものをこなすだけではなく、活用して新しく価値づけることができるか、人の主体性が問われている。教育という閉じられた世界ではなく、人間として生きるシビアな話だと思う。
- ・(宮本委員) 中学生にボランティアをお願いすることがあるが、今一つ元気がない。やってきていることが活かされていない。夏祭りの手伝いに来てうじうじしている。指示をされないといけないのかなと思う。学校では行事が減らされているように感じていて、子供主体のものが減らされているのではないかと思っている。人前に出る機会が減らされている。学校で学んだことを生かす方法が彼らには伝わっていない。
- ・(針生委員) 保護者の立場からだが、学校は一生懸命やっていると思っている。いい子はいい、悪い子は悪い、という感じで、学力が二極化している。底上げをして積み重ねて二極化を縮めていく。できない子は、昔は放課後にやっていた。今は、放課後の補習の時間もとれないほど忙しくなっている。自信がないと躊躇してしまう。二極化を縮めていく方向を形として残してほしい。子供は何かのきっかけで伸びていくもの。今だからこそ全体を見据えた上で取り組む。

### (3) 枠組みと考え方について

- ・(委員長) 応用力と基礎的知識の関係を具体的にしていくこと。全国学テの小6算数の活用問題で、社会や国語、総合的な問題になっている。個人的には好きな問題。教科は縦割りになっているため、こういう問題は教科書で、多く扱われていない。今の縦割りの教科にはない。
- ・(今野委員) 教科にとらわれない問題が増えて、社会的にはそれを解決する、社会人基礎力みたいなものが大事になってくる。2020年の大学入試では応用力を見るという方針になっている。今の中2から。7年前に比べて、応用力の必要性が増してきて、コミュニケーション力や応用力がないとなかなか生き残っていけないようになる。また、コミュニケーション能力や主体性が求められている。次の学習指導要領ではアクティブ・ラーニングがキーワードで、子供たちがどのように学習意欲を持ちながら、能動的・主体的に学ぶことが大事になってくる。矢印で関係性を示しているが、さらに示せるとよい。学力の底上げも重要。そのベースとなる自己肯定感も土台となってくる。枠組みをもう少し踏む込んだ関係性を、仙台市としてどういう子供にどんな学力を付けていくか、5年間必要なものをご意見いただければと思う。
- ・(委員長) あまりにも難しい応用力もあれば、例えば、百分率の問題でも、青葉区の〇%という現実的な問題だとずっと入っていくときもある。ちょっとやれそうな応用力もあり、それを解かせてみるということもある。
- ・(今野委員) 一般に言われている応用力というよりも、他者との協働を含めたいろんなイメージとしての応用力。基礎的知識はイメージできるが、学習意欲はイメージがつきにくい。学力の底上げのためには学習意欲を持たせることが遠回りだけど近道。長い目で見ると大事なところかなと思う。
- ・(荒井委員) 法律の改正をするための作業が、以前は10人以上でやっていた作業が一人か二人でできてしまう時代になった。AIの発展によって、より高度な思考力・判断力を求められるところに、人が必要となると思う。
- ・(佐々木委員) 企業側にとっては、応用力を身に付けることは追い風になる。
- ・(大草委員) 今の子供はやらないといけなくて多くて、逆にやらないと不安になっている。
- ・(委員長) 応用がメインという考えも。応用のための基礎という捉え方もある。

- ・(佐藤委員) 応用力の育成に関してはプランとしては弱いものがある。学習意欲はいくつか立ち上げて行っているが、応用力はそうではない。基礎的知識が未定着な子供たちをフォローする視点で考えるが、これからの社会に求められる力というものが先にあって、そのための「基礎」という発想も面白いと思う。
- ・(佐々木委員) 応用は基礎がなくてもできるというところも感じている。また、応用からの基礎というものも必要になってくる、という考えも分かる。

#### (4) 第2期仙台市教育振興基本計画

- ・(荒井委員) 幼児期からの切れ目のない教育の推進は大切。学習の遅れと関連がある。2, 3歳の頃に、大人との関わりが多いグループとそうでないグループの子供たちが、将来の収入や犯罪歴に大きな影響を与えることを実証したアメリカの研究にも表れている。幼児期のケアは効果的。人との関わり方が重要な時期。子供未来局と連携しながら対応していくことになる。子供の貧困については、相対的貧困の割合が高くなっている。
- ・(大泉委員) 小学校から中学校に上がるとき環境や気持ちの変化が表れる。一つの分岐点であり、大切な時期。中学校から不登校が増えていることから、学習が難しくなり、自信がなくなる。また、子供の貧困の話が出たが、成長と共に周りとの違いに気付き、中学生は貧困に対して自覚をするようになる。より気を付けていかないといけないと思う。
- ・(佐々木委員) 義務教育ではない前の部分に着眼しているが、どんな問題があるのか。
- ・(佐藤委員) 就学前教育は子供未来局が管轄。義務だけの問題とするのではなく、幼保と連携した取組として何ができるか、踏み込んでいきたい。
- ・(事務局) 目の前の子供たちが、以前の子供たちと違う姿が見られる。保護者自体が忙しく、子供と関わる一番大事な時にすぐ保育園に預けるなど、本当は1年生までに育ててほしい部分が育っていないというところがある。小学校から叱咤激励して頑張ろうとしても難しいという現実がある。そうでなくてもっと就学前から幼稚園や保育園が協力することが必要なことを感じていた。具体的には、キレやすい子というのがその時期から始まっていて、我慢することができない、固定した友達はあるがみんなで何かすることは苦手、友達の言うことが聞けない、などの今まで見てきた子供たちとは違う課題が見られるようになり、就学前の連携が大事であることを感じている。保護者の子育ての悩みもあることから、幼児教育にメスを入れ、保護者が抱えている問題の解決も確かな学力につながってくると考えていた。
- ・(今野委員) 義務教育と幼児教育は所管の違いもあって切れていたが、そこを何とかつなげたい。幼稚園は教育機関だが、保育園は要するに預かる機関。子供園も新たにできていて、子供未来局も幼児教育の指針の策定に向けて取り組んでいる。そういうところを学校教育でもコラボレーションできないかと考えている。
- ・(佐々木委員) 幼保の課題として、何か検証したデータはあるのか。
- ・(杉山委員) なかなかそのようなデータはないが、今後の課題だとも思う。有識者会議では、第1期と違い、幼稚園側にも参加してもらい、課題を洗い出しているところである。
- ・(堤委員) 学校では必ず幼保小連絡会を行い、話し合いも行うが、そこでも格差が見られる。潤沢な教育をしている幼稚園もあれば、課題の多い子供を何とか見ているというところもある。
- ・(佐藤委員) 幼保小合同研修会を開いているが、最初は幼保側の参加者が80名くらいだったのが、今は2.5倍で200名を超えるようになってきている。幼保側が連携の必要性を感じていると思う。担当が幼保の研修に呼ばれて行くことがあるが、小学校の教科書を初めて見たという人がほとんど。受け持った子供がどのようなスタートをするのか、相互理解が必要だ。
- ・(今野委員) 学校では幼保と引継をするけども、20~40くらいの幼保から来るなかで、いろいろな幼保がある。英語の早期教育をしているところもあれば、遊びでたくましくなっている子供もいる。幼児教育のばらつきが見られ、やるべきことを受けないで上がってくる場合がある。

#### (5) その他

- ・(荒井委員) 学習の遅れがちな子の対応として、放課後の補充学習などサポートできる体制があるとよい。
- ・(宮本委員) 小1サポーターに入ってもらっている。手のかかるクラスとまとまりのあるクラスの違いは先生によると思う。細かい指示を出さない先生のクラスは手のかかる児童が多くなる。幼児期は親に厳しく育てられている方が、多少道を外れてもそれが残っている。目があって手を掛けてあげるとちゃんとできる。

- ・(委員長) ソーシャルスキルの問題もある。教員の研修も必要であろう。
- 4 事務連絡(事務局)
- ・次回, 引き続き新プランの検討で協議する。  
(次回: 第4回 平成28年11月24日(木) 午後3時30分~ 教育局第2会議室)
  - ・追加の意見等はメーリングリストで行う。
  - ・参観可能な授業等について。
- 5 閉会

平成29年6月2日

署名委員

板垣信哉 (印)